

戦争で疎開した油彩画の特徴的な亀裂と修復

◎吉井美央（文化財修復スタジオ ノア）、武田恵理（東洋美術学校）

1. はじめに

「女子医専解剖教室」（制作年：1939年、サイズ：H322×W412×D24、油彩画）は福島県出身の画家・吉井忠の作品である。作品の損傷が激しく、現状のままでは公開・展示に耐えられないと判断され、所蔵者の依頼のもと修復が行われることになった。塵埃汚れや、画布のたわみが見られる他に、描画部分全体に縦横に走る特徴的な亀裂があり、その一部では絵具層の剥落が始まっていた。この研究は、作品全体に走った亀裂の発生原因を考察する。また、調査により戦争による困難な状況を潜り抜けた作品であることが判明したことから、過去の歴史を含めた修復方法を探り、最終的に作品がどのように修復したかを報告する。

2. 作者紹介

吉井忠(1908年7月25日-1999年8月5日)は、第二次世界大戦前からシュールレアリスム絵画に影響を受け、日本の前衛美術運動に積極的に参加した画家である。太平洋美術研究所に入り、同じく画家の鬘光、麻生三郎、井上長三郎、鶴岡政男、松本俊介らと親しい交流を持った。吉井忠は大正の終わりから第二次世界大戦の終戦頃にかけて東京都豊島区周辺に存在した、「池袋モンパルナス」に住居を置き、芸術活動の拠点とした。戦後は故郷福島県をはじめとした東北地方の文化・歴史・現状に目を向け、戦後の復興を遂げる都会から置き去りにされる「地方」を周り、絵画と文章で記録した。

吉井忠は1936年から敗戦まで、日常、芸術、思想詳細などを詳細に日記に記していた。日記からは戦時下の画家たちがどのような政治情勢・統制におかれていたか、また芸術家同士でどのような交流をしていたかを伺え、現在、戦中の美術史研究を助ける資料となっている。

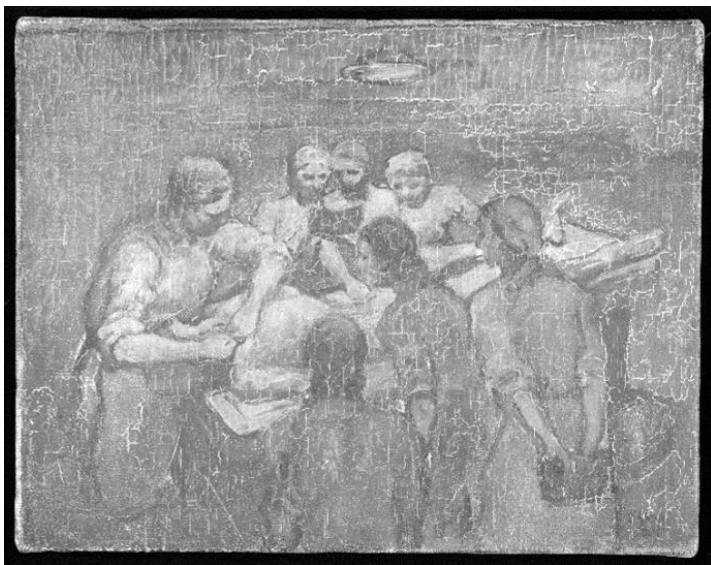


Fig 1. 修復前写真（通常光）

3. 作品調査

作品には縦方向に走る経年亀裂と、横方向または絵具の輪郭に添って走る乾燥亀裂が目立った。修復にあたり、作品の所蔵者である吉井爽子氏（吉井忠の親族）へ聞き取り調査を行う中で、この作品は1945年に吉井忠が福島に疎開する際に木枠から画布を外され、家財と共に移送されたことが判った。これにより、縦方向に走る多くの亀裂は画布を丸めた際に発生したことが推測できた。

乾燥亀裂は絵具の固化過程で生じる亀裂であり、以下の特徴がある。

- 1) 下層の絵具が固化する前に上層の絵具が固化した場合に発生しやすい。
- 2) 顔料と油分のバランスが良好でない絵具を用いた場合に発生しやすい。

さらに本作品の亀裂は、戦中に作られた低品質の画材によって発生した可能性もある。当時発行された絵画技法書の中には、第一世界大戦直後のフランスの絵具の品質低下を指摘する記述が散見される。吉井忠が使用した絵具もそれに準ずる品質であったことが推測できる。吉井忠は作品制作当時の日記の中で、「(※第二次) 大戦が勃発する可能性が高い。絵具が買えなくなるかもしれない。アサオ(※現在の浅尾拂雲堂)にドルアンエノグを買いに行く」という旨の記述を残している。ドルアンエノグとは、フランスのドルアン社(※現在は廃業)の油絵具のことだと推測する。ドルアンエノグは吉井忠と親交のあった熊谷守一の文書目録にも登場し、当時の画家が多く使用していた画材であったことが判る。

4. 修復方針

所蔵者への入念な聞き取り調査と、制作当時の作者の日記を調査したことで、本作品の画面全体に走る特徴的な亀裂や損傷は、疎開による慌ただしい移動や物資不足など、戦争が原因で発生した傷痕と言えることが分かった。作品のもつ歴史的価値の側面を守るため、修復は作品の辿った歴史の傷痕の保存も念頭に置き処置を施した。

5. 修復処置

修復にあたり、以下の処置を施した。

- ① 絵具層の剥落止め
- ② ウェットクリーニング
- ③ 木枠から画布の取り外し
- ④ 木枠と裏面のクリーニング
- ⑤ ストリップライニング
- ⑥ 画布のほつれの処置
- ⑦ 木枠への張り直し
- ⑧ 充填整形
- ⑨ 補彩
- ⑩ ワニス塗布

6. おわりに

過去に日本人油絵画家が戦後に描いた作品を修復したが、本作品にはそれらの作品群には見られない複合的原因を持つと思われる特徴的な亀裂があった。作者の親族への聞き取りと文献の調査により、その原因が疎開や戦時中に作られた低品質の輸入絵具に起因する可能性を見出せた。これらにより戦争直前のフランスで作られた絵具の現在の劣化状況を知ることができた。また、作者の日記の調査を経て、修復前調査の重要性を再認識し、作品の持つ史実的側面を保持した修復方法を考察した。

謝辞

本研究を進めるにあたり、作品所蔵者の吉井爽子氏に研究の許可と調査協力を頂きました。記して深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 弘中智子「ようこそ、アトリエ村へ！ 池袋モンパルナス展 20世紀検証シリーズ No.3」板橋区立美術館(2011)
- 2) 清水智世「吉井忠と東北一戦争がもたらした表現の差異について」『生活と文化 豊島区郷土資料館研究紀要第26号』(2017)
- 3) 石井柏亭、西村貞、「画の科学」中央美術社(1925) pp-5-7
- 4) 萩野健児「油絵と水彩画の描き方」巧人社(1933) pp.164-165
- 5) 足立源一郎「技法研究・洋画基礎」宝文堂(1931) pp.16-18
- 6) 第53集熊谷守一文書目録、1936年8月23日、「巴里 ドルアン絵具」新荷着案内、アサオ絵之具店